

新 おおさか KEYワード 【第30回】

埋め立てられ、姿を消した後も 川は様々な物語に連なっていく

毎年、偉人の生誕や施設・団体の設立を記念したイベントが開催される。今年も常翔学園の前身である関西工学専修学校が開校して100年で、大阪工業大学では、9月に「大阪まちづくりの軌跡と文化～大大阪を中心に～」と題する記念の企画展とシンポジウムが開催された。かく言う私の大阪大学総合学術博物館も、現在、創立20周年記念展「MOU収蔵品展—創立からもう20年—」を開催している(12月17日まで、日祝休館)。

しかし、今年は他にも大阪にとって大きな記念の年であった。それが長堀川開削400年である。長堀川は東横堀から分かれて真西に向かう東西の運河で、船場と島之内、あるいは堀江と新町の境界となっていた。400年と比べると創立20年など、歌舞伎の石川五右衛門ではないが、小せえ、小せえ一。

開削の由来を伝えるのが、昭和37(1962)年、心齋橋筋の旧家から出てきた「浪華長堀心齋橋記」「心齋系図」という古文書である。郷土史家の牧村史陽の鑑定によるとこの古文書は、心齋橋の名の由来となった岡田心齋から三代目の当主が記録させたもので、元和8(1622)年、伏見から移住した町人4人が川を開削したことが分かった。彼らの名は川沿いの町名に、長堀次郎兵衛町、長堀心齋町、長堀平右衛門町、清兵衛町として、明治5(1872)年まで残っていたようだ。

長堀川上流の埋め立てが昭和35(1960)年に開始され、昭和39(1964)年に工事が完了する。地下街・クリスタ長堀が、川の流れていた空間にあたる。西横堀より下流の、いわゆる西長堀川も、昭和42(1967)年に埋め立てが開始され、昭和46(1971)年に完了した。

今はなき運河の「道行名残の橋づくし」といった趣で、住友の旧銅吹所近くの安綿橋から西に向かって順に長堀川の橋を書き連ねると、次に板屋橋があって、戦前、難波出店前の高島屋があった長堀橋、長春堂病院の医師、藤中泰氏が架橋した藤中橋、そして中橋、三休橋、心齋橋とつづく。隣が御堂筋開通で新設された新橋、文楽座に近い佐野屋橋、四つ橋のうちの炭屋橋と吉野屋橋から西長

堀川に入って宇和島橋となり、西大橋、江戸時代の天文学者の間重富(長涯)が天体観測した富田屋橋、問屋橋、白髪橋、新鯉座橋、鯉座橋、玉造橋、洲崎橋となって木津川に注ぐ。

個人的に聞いた話を紹介すると、前衛美術グループ・具体美術協会の白髪一雄さんからは、ご先祖が白髪橋付近にいたのと名前が関係するかもしれないという話をうかがった。大阪市立近代美術館(仮称、現・大阪中之島美術館)建設準備室の顧問もつとめた京都大学名誉教授・乾由明先生は、心齋橋の料亭・播半がご実家で、少年時代には、水上バスが運行していたことや、長堀橋あたりに魚をとる梁があったとおっしゃっていた。梁は、川に仕掛けた簀の子に飛び乗った魚をとる漁法である。

私の実家も長堀川の近くにあり、小学生のころ、石垣の横の階段を降りた川沿いの半地下にあったそろばん教室に通ったし、大阪市立電気科学館の展望室から、埋め立ての土砂が投入された西長堀川をダンプカーが走り、重機が整地しているのを眺めた記憶もある。母によると埋め立ての時、逃げ場を失ったドブネズミが付近の民家に押し寄せて困ったという。

小学校の大先輩、肥田皓三先生には、夜の時報の鐘が長堀橋北詰のビルから聞こえてきましたやろ、と教えられ、遠くから鐘の音が聞こえてくると、子どもの私は、寂しい気分になったことを思い出した。

400年もの歴史があれば、他にもいろいろな物語がこの川にはあっただろう。今年、心齋橋の石柱が大阪市指定文化財に指定され、開削400年に花を添えたが、コロナ禍で制約も多く、水都を代表するこの川の記念の年は、静かなまま暮れていく気がする。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館教授(前館長)、大阪大学人文学研究科(兼任)。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現像—』(創元社)など。

